

MACF 礼拝説教要旨

2022年4月24日

「もう泣かなくともよい」

ルカによる福音書7章11節～17節

7:11 それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。

7:12 イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出される場所だった。

その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。

7:13 主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。

7:14 そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。

イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。

7:15 すると、死人は起き上がったものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。

7:16 人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。

7:17 イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

\*\*\*\*\*

### 1) 一人息子の死

町の人たちは皆悲しみを共にしていたと思います。ある母親の一人息子が亡くなったのです。しかも、この母親はやもめでした。

途方にくれた母親は誰から観ても気の毒で、しかも、掛ける言葉も見つからないほどだったと思います。

わたしたちの出会いの中で「声をかけることもできない」という場面が時々あります。

私はカウンセラーとしていろいろな人の話を聞かせていただいておりますが、言葉を返すことが出来ないような状況の方々も少なくありません。

なぜ、どうして、そんなことが、と思うようなできごとが悲しいことですが人生の中ではしばしば起こります。

大勢の人がそこにいるにも関わらず母親にかける言葉もなく、ついていだけ。

### 2) 憐れに思い

その悲しみにくれた集団をイエス様が見るのです。そしてそれまでは「イエスは」と表記されているのに、この箇所は「主は」となっています。

7:13 主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。

単にひとりの人間としてこの可愛そうな母親に同情したというのではなくむしろ神の心の代弁者としての悲しみ、痛みを心にしっかり受け止めたのだと思います。

イエス様が人間的に「可愛そうだな」とおもっただけでなく「神の視野から見て本当に心の痛むできごと」だったでしょう。

ですから、その心の動き、激動というか、感動というか、そういうものに押し出されて、その母親に語りかけます。

「もう泣かなくともよい」

### 3) もう泣かなくとも良い

もし、あなたがこの母親だったとしたら、このイエス様の言葉をどのように受け止めますか？

「見ず知らずのあなたが、わたしの心の痛み、寂しさなどわかるはずがないでしょう」

と腹をたてるでしょうか。

ここには、誰も止めることができないほどの深い同情心、共感、共苦の心がイエス様から

この母親に向けられています。つまり、この母親はまだこの御方が誰だか知らないのですがこのお方の方では何をなさろうとしているかご存知です。

だからこそ「もう、泣かなくともよい」と語ったのです。

憐れに思い、心に深い同情の気持ちをもってイエス様が母親に語り、棺に近づいていった時イエス様の心は「死の前にまったくの無力感」だけしか感じることなく打ちひしがれているすべての人に向けられていたと思います。

つまり、この「もう、泣かなくともよい」という言葉は、今、「死」という問題について、悲しみ、悩み、苦しんでいるあなたにも語られている大切な言葉なのです。

さらにいえば、「もう泣かなくともよい」という言葉は「主であるわたしがここにいるから、もう泣かなくともよい」と理解することができます。

私は臨床美術の関連からも牧師、カウンセラーという立場からも「いてくれてありがとう」という言葉の重要さを語ってきました。

しかし、今、この「いてくれてありがとう」を受け取る大切な言葉、「いてくれてありがとう」にさらに重要な意味付けを与える言葉があることに気付かされています。

それは「私は、ここにいるよ」という言葉です。

つまり、「いてくれてありがとう」は言われたら気持ちが落ち着きますし、ほっとするのですが、それだけでは、中途半端になってしまうことが多いのです。

「いてくれてありがとう。わたしは、ここにいるよ」とつながったとき、いてくれてありがとうの意味が大きく変わります。

安心の度合いが大きく変わるからです。

イエス様は、この母親に「主であるわたしがここにいる。だから、もう泣かなくともよい」と伝えたのだと思います。

4) 「若者よ、あなたに言う。起きなさい」

7:14 そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。

イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。

7:15 すると、死人は起き上がったものを言い始めた。

奇跡が起こりました。死んでいた息子が起き上がったということです。

先週、イースターでした。復活というのは蘇生という意味であるより「再び起き上がる」という意味だということを語りました。

ここでも「起き上がった」という表現が使われています。そして、

7:16 人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、

「大預言者が我々の間に現れた」と言い、

また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。

人々にはこのできごとが、いわゆる人間的なトリックではないことがわかりました。神の御業だと理解できたのです。

ちょっとだけ、「死人が起き上がる」という言葉に触れておきたいと思います。

肉体的には人間は間違いなく死を経験します。しかし、神の息を吹き込まれた人間は「肉体によって経験できるいのち」と神のかたちとして「永遠性を共有するいのち」を持っています。ただ、わたしたちはあまりに肉体的ないのちにこだわりすぎて、肉体が死んだらすべてが終わりと考えがちなのです。

この物語は、人間は肉体的に死んだら終わりと考えている現代人にはわかりにくいものです。

キリストは肉体的に死ぬであろう、わたしたちを起き上がらせ、目覚めさせ、永遠の世界の中に導き入れてくださいます。

聖書の中では肉体の死を「眠り」と呼んでいる箇所があります。神様は、イエス様をとおして永遠の世界へとわたしたちを導き入れ、目覚めて、起き上がる日を用意してくださっています。

そこに大きな希望があるのです。

だから「もう、泣かなくともよい」という言葉がとても重く響くのです。

そして、同時に「私は、あなたといつも一緒にいるよ、だから、もう泣かなくともよい」

ということが理解できた時、わたしたちの心の中に大きな安心と慰めが届くのです。

\*\*\*\*\*

MACF 礼拝映像はこちらです。

[https://youtu.be/ljgXEz8\\_gcg](https://youtu.be/ljgXEz8_gcg)